
艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 砲艦「佐州」型

火龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 砲艦「佐州」型

【Nコード】

N0578BA

【作者名】

火龍

【あらすじ】

ロンドン海軍軍縮条約の失効を見据えた日本海軍は、将来出現するであろうアメリカの新型戦艦に対抗して「秋津洲」型戦艦の建造を計画する。ところが「秋津洲」型戦艦の主砲は余りに巨大であり、陸上のみならず海上での試射を求める声が上がった結果、連装砲塔を一基のみ搭載するという砲艦が建造されることになった。

本作は「艦魂たちともうひとつの日本海軍史」外伝第三弾です。

第一話 寄せ集め

ロンドン海軍軍縮条約の失効後、日本はアメリカの「ノースカロライナ」級や「サウスダコタ」級を仮想敵とした「秋津洲」型戦艦の建造に着手する予定であった。しかし彼女たちに搭載する五〇口径四六センチ砲は、装甲を張った場合は連装砲塔一基だけで重量が二千トン近くに及ぶなど、破格の大きさを持っていた。

それだけの大型砲塔になれば、製造や運用には今まで以上の技術が要求されることは明白である。そのため「秋津洲」型戦艦に搭載する主砲塔を試作及び試射することになったが、陸上に設置した状態での試験だけでは得られる試験結果が不十分であるとして、連装砲塔一基を搭載する実験艦のような砲艦の建造が提案された。

だがいくら新型戦艦建造に備えた技術蓄積のためとはいえ、一種類の主砲塔を試験するためだけに数千トンの軍艦を建造する余裕は日本に無い。そこでこの砲艦には、在来の艦艇に対する近代化改修で搭載される予定の電探や対空火器が寄せ集めのように搭載されることになった。

こうして四隻が建造されることになった兵装試験艦は、砲艦に類別され一番艦から順に「佐州」、「淡州」、「吉州」及び「対州」と命名。これはそれぞれ佐渡国、淡路国、吉岐国、そして対馬国の別名であり、命名基準も砲艦と同じであった。なお、要目は以下のとおり。

全長一四〇メートル、幅二八メートル、喫水三・五メートル、深さ一〇・五メートル

基準排水量九〇〇トン、満載排水量九九〇〇トン

機関石油専焼缶二基、タービン二基二軸、二四〇〇〇馬力、速力二〇ノット

航続距離一五ノット（一二〇〇〇馬力）で六〇〇〇海里、燃料搭載量二〇〇トン

・居住設備

士官・准士官・特務士官合計三六名（及び予備士官室）分、下士官一二〇名分、兵一八〇名分

その他、約三〇名分の便乗員用個室を設置（試験時の技術者等）
・兵装

五〇口径四六センチ連装砲一基二門（艦首）

五〇口径五インチ連装両用砲二基四門（艦橋左右に各一基）

四〇ミリ四連装機関砲二基八門（煙突後部）

二〇ミリ単装機銃四基四門（艦橋周辺）

この排水量は、ロンドン海軍軍縮条約における「特務艦」として扱われることを狙った数字である。現にイギリス海軍は、戦艦の保有枠とは別に軍縮条約の期間中も十五インチ（三八一ミリ）連装砲塔を一基だけ装備した砲艦「マーシャル・ソルト」、「エレバス」及び「テラー」を保有していた。

そのため軍縮条約を気にせず起工できるのであるが、十八インチ連装砲塔の試作品が完成するまではおいそれと起工できない。大型の砲塔は進水までに搭載しておく必要があり、砲塔の製造が遅れば船体を早めに建造した意味が無くなってしまふからだ。

それどころか、船体の完成から砲塔の搭載までの間が空けば、それだけの期間は船台を占拠し続けることになる。将来発生する公算が大きい対米戦に備えて多数の商船や軍艦を建造したい日本にとつて、一万トンクラスの艦船を建造できる貴重な船台が一ヶ所でも必要以上の期間に亘って使えなくなることは重大な問題であった。

しかし幸いにして砲塔の形式や砲身長が早期に決まったことや、これまでの主だった軍艦の主砲塔と同じ連装砲塔であったこと、そして何より日本の工業技術力が史実より大幅に改良されていたことで、一九三五年（史実ではこの三年後）に試作砲塔が完成した。

そして、一番艦「佐州」が一九三六年四月一日に起工されたのを初めとし、四番艦までが半年ごとに起工。起工から進水までに一年、進水から就役までさらに一年という工期で、これまで日本が建造してきた砲艦と比べると異例の長期建造であった。

史実では河用砲艦の「橋立」及び「宇治」でも一年半近く、イギリスが建造したほぼ同規模の「アバークロンビー」ではおよそ二年にも及び、砲艦やモニターという艦種そのものにとってはさほど長すぎる工期ではない。だが勇が転移した後の日本は砲艦と言えば「羽州型」河用砲艦ぐらいしか建造していないので、相対的に長く思えるのだ。

そして一九三七年三月二十日、一番艦の「佐州」が横須賀工廠でほぼ予定どおりの期日に進水。勇はそれまでと同じく、新型艦船の一番艦の進水に立ち会うために、海軍省から現地へと向かった。

第一話 寄せ集め（後書き）

作者「皆様、明けましておめでとう御座います」

富士「元日だろうとお構いなしの更新か……いや、今までもそうだったな」

作者「とはいえ既にネタは底を尽きかけ、このままではあと数か月で活動を休止せざるを得なくなるやもしれません。勇が現代に戻った後の話が書ければ、暫くはそれを書き続けられるでしょうが」

敷島「活動五年目に入ったって言うのに、弱気だねえ」

作者「それだけ切羽詰まっているということですよ。あるいは、もっと前からの歴史改変を描いてみるというのもありかも知れません」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「砲艦『佐州』の艦魂が、誕生早々富士を狼狽えさせます。次回『心眼』ご期待ください」

第二話 心眼

同日、横須賀海軍工廠の船台。

「わかつてはいたが……どうも不自然なんだよなあ」

艦の前方に据え付けられた、船体の半分もの幅を有する砲塔。そして「大隅」型以来の戦艦とほぼ共通の、一四メートル測距儀を備え付けた艦橋。満載排水量でさえ一万トンに届かないこの艦には、何れも大きすぎる代物である。

他にも電探や高角砲、機関砲、そして機銃など、この艦には万が一の対米戦に備えて開発されている兵器の試作品が至る所に搭載されていた。最早砲艦というよりは、船の形をした新兵器の見本市と言ったほうがしっくりくる状態である。

「あ、有馬中将。こんにちは」

「有馬……なんだ、この化け物は」

「まるで、主砲を撃つ以外の全てを捨てているみたいだよ」

三笠は勇と会えたことで嬉しそうな表情だが、富士と敷島は「佐州」の外見に呆れ果てているようであった。二人ともこの艦の建造目的は知っているが、如何せん「佐州」の見た目が、それまでの軍艦からかけ離れすぎている所為である。

「こう言うのは憚られますが、日本刀一振りだけを持って死なば諸共飛びかかっていきそうな艦ですな」

「まあ、敵施設や砲台への砲撃には有効かもしれませんが……汎用性には欠けるでしょうね」

朝日の言葉は無理からぬものだったが、この艦には「飛びかかって」いくだけの足の速さは無い。精々、大隅の言うように陸上の目標に対する艦砲射撃ぐらいしか、実戦におけるこの艦の利用法は無さそうであった。

「そろそろ、進水の時刻だ……三笠、取り敢えず艦橋の電信室（艦橋の根元にある部屋）に連れて行ってもらえるかな？」

「はい。艦橋の構造は、今までの戦艦と同じですよね？」

「ああ。よろしく頼む」

電信室へと降りたつた六人は、一先ず階段を下りて予備士官室へと向かう。予備士官室は中甲板の左舷艦首寄りに位置しており、艦橋の下からは少々距離があったものの、幸い他の人間に発見されることなく移動することができた。

「それでは、私は本艦の艦魂をここに連れて参りますので、暫しお待ちください」

そう言うと、大隅は予備士官室前から姿を消し、主砲塔の前に立つ。そして数分後、船台への注水によって浮き上がった「佐州」の艦首に現れた艦魂と遭遇した大隅は、簡単な挨拶と自己紹介を交わして「佐州」予備士官室に戻った。

「お初にお目にかかります。私が大日本帝国海軍『佐州』型砲艦一番艦、『佐州』の艦魂です。以後お見知りおきの程を」

大隅の隣にいたのは、上総をあどけなくしたような、それでいて眼光の鋭い艦魂であった。腰には短剣の他に長めの刀を二振りも提げており、全身から放つ威圧感と合わせて、彼女が生まれながらに

して剣術の才に恵まれていることを匂わせた。

(おそらく、私なら勝てるだろうが……朝日や上総が相手なら、さほど差は無いかもしれんな)

自分の後に敷島や朝日が佐州に対して名乗っている間、富士は口を噤んだまま、相手に悟られぬよう気を遣いながらもじっくりと佐州の力量を見極めようとする。すると一通り挨拶を交わした佐州が、ふと富士の方を振り向いた。

「私は貴方に仇為すつもりは御座いませんので、御安心を……貴方が日本に仇為さぬ限りにおいて、という条件付きではありますが」

自分の心中を見透かされたも同然の形になった富士は、佐州の言葉に動揺せざるを得ない。今まで彼女は新しい艦魂と出会うことに相手の身体能力や武術の腕を推し量る癖があったが、一度としてそれを見破られたことは無かったからだ。朝日や上総でさえできなかった芸当を、佐州は生まれたその日にやってのけたことになる。

「富士、どういうこと？」

「す、済まない。私は初めて艦魂と会うときは、そいつの力量を測ろうとする癖があったな……だが、こころもはつきりと見破られたのは初めてだ」

富士の告白に、今度は富士と佐州以外の全員が驚く番であった。特に富士と一番付き合いの長い敷島は、朝日や上総の時も含めて富士が他の艦魂と初対面するという場に何度も居合わせていたにも拘らず、そのことに一切気付かないでいたから尚更である。

「朝日や上総も気付いた素振りさえ見せなかったというのに、こころ

も真正面から宣言されるとはな……私が迂闊でなかったのだとすれば、相当な洞察力を持っていることになる」

佐州が進水早々見せた才覚に、六人は驚きを通り越して最早戦慄していた。

第二話 心眼（後書き）

敷島「心眼の前で隠し事は不可能……ってやつ？」

作者「一応、彼女は平均的な艦魂以上の視力を持っているという設定です。念のため」

大隅「で、目の部分に布を巻いているわけでもないのですね」

作者「ついでに言うと、丸っこい盾も使わない」

三笠「本編に関係があるようで殆ど関係の無い話はさておき、次回予告をお願いします」

作者「佐州が、砲撃試験の最中に涙を流す訳は一体？ 次回『活かせぬ力』ご期待ください」

第三話 活かせぬ力

進水した「佐州」の船体には、未だ試作品の域を出ていなかった当時の最新火器や電探が搭載されることとなる。これにより進水の時点で既に奇異な外観を呈していた「佐州」の船体は一層怪奇な見た目となっていくことになるが、試作兵器を多数装備しているというところで工員たちには厳しい緘口令が敷かれ、工廠の外で彼女の寛容はおるか存在そのものさえも噂になるようなことは無かった。

そして進水からおよそ一年後の一九三八年三月二十三日に艦装が成った「佐州」は、機関等の試験を経たうえで四月一日に日本海軍籍へと編入。その姿を横須賀軍港に現し、初めて彼女を目にした将兵たちの度肝を抜いたのであった。

数日後、横須賀沖。

「なんだあの化け物は……積んでる砲はどう見ても戦艦並みだぞ？」
「ひよつとしたら、砲塔は『因幡』型より大きいんじゃないか？」

もしこの砲を搭載してるのが通常の新型戦艦であれば、「佐州」の写真を見たアメリカの間諜によって四六センチ砲であるかもしれないとの疑いを持たれたであろう。しかし「佐州」の見かけ上の大きさはイギリス軍が当時保有していた一五インチ砲搭載モニターである「エレバス」及び「マーシャル・ソルト」と大差なかったために、そのような事態は避けることができた。

加えて乾舷の高さが前述の二隻を大幅に上回っているため、二隻とは異なり砲塔の基部が完全に船体へと内蔵されていたのである。このことが砲塔の大きさを船体に比べて小さく見せることに一役買

い、事前に公式発表として公開された一六インチ砲であるとの偽情報
報が信じ込まれる一因になった。

「戦艦ではない私が、一時的にとはいえ海軍で最大の艦砲を装備す
る艦になるとは……おかしな話だ」

甲板上に露出する部分を装甲の傾斜によつて可能な限り小さくま
とめたとはいえ、直径十メートルを優に超える砲塔は否が応でも目
立つ。その不自然さは当の佐州さえいまだに受け入れ難いものであ
り、この日も彼女は自分の砲塔を露天艦橋から見下ろしながら怪訝
な表情を浮かべていた。

この日に初めてとなる主砲の発射試験を控えていた「佐州」は、
この後横須賀の南方およそ五十海里の沖合まで移動。周囲に民間船、
特に外国船舶がいると主砲発射時の衝撃や爆風から主砲口径が外部
に推測される恐れがあるため、周辺の海域は沿岸警備隊が封鎖して
いた。

「撃ち方始め！」

主砲を左舷に向けた状態で、まずは「佐州」の主砲塔が交互撃ち
方を開始する。同時に船体の前半部は満遍なく強烈な爆風に晒され
ることとなり、佐州のいる露天艦橋にも強い風が吹き荒んだ。

「す、凄い……まさかこれ程とは」

佐州が驚嘆している間も、爆風が幾度となく彼女の体を襲う。そ
して艦橋内部では水上砲撃時の射程距離や散布界の広さが計測され
ていき、史上最大の艦砲（イギリスの所謂「ハツシュ・ハツシュ・
クルーザー」は正一八インチ、即ち四五・七二センチ砲）の詳細が

克明に記録されることとなった。

「よし、続いて左右同時発射を行う」

二門の四六センチ砲が同時に天を仰ぎ、四五度になったところではほぼ同時に火を噴く。左右双方の発射時における爆風がお互いの弾道に干渉しないよう、厳密に言えば二門の発射には僅かな時間差が存在するが、直後に艦全体を襲った烈風はそのようなことを微塵も感じさせないものであった。

「まずい、このままでは……っ！」

佐州は不意に襲った爆風によって吹き飛ばされそうになったが、慌てて目の前にあつた双眼鏡にしがみついて事なきを得る。四六センチ砲の発射による爆風の威力は、通常「佐州」の主砲から露天艦橋まで程度の距離があつても人を吹き飛ばす程なのだが、史実の「大和」型戦艦に設けられていたような整流板を設けることで影響を最小限に抑えていた。

なお史実では、竣工時の戦艦「長門」において志願者を集めた上で露天艦橋に立たせ、主砲を斉射したところ爆風によって全員が壁や柱に叩きつけられた挙句気を失つたという。おまけに彼らが来ていた服のボタンも、多くが引き千切られたようになっていたとの証言が伝わっている。

「はあ、はあ……流石は世界一の巨砲、と言うべきか。これだけの砲があれば、『コロラド』級どころか『ノースカロライナ』級とて撃沈できる……はず」

息を荒げながら「できる」とまで言ったところで、佐州の声は急

に小さくなってしまふ。それはいくら自分が強力な主砲を持っているようと、所詮は試験艦としての装備に過ぎず、敵の戦艦に対して発射することはまず有り得ないということに気付いてしまったからであつた。

「そう……だつたな。私には、この砲を敵戦艦に向かつて放つことなど到底許されない。所詮、私は試験艦に徹することしかできないのか」

やり場のない悔しさとも怒りともつかぬ感情が込み上げ、佐州は先程までとはうって変わって涙ぐんでしまふ。程無くして、彼女は最後の砲撃試験を見届けることも無いまま、失意のうちに自室へと戻っていった。

第三話 活かせぬ力（後書き）

富士「しかし、試験が終わったらいつはどっすののだ？」

作者「一応、用途は考えてあります。警沢を言えば彼女たちのような特殊な艦にはさせたくないのですが、本来この任務に当たっていた艦が抜けてしまいますからどうしようもありません」

敷島「本職が抜ける……そういうことね。でも悔しいけれど、むしろ今の本職がやるよりも状況は改善されると思うよ」

三笠「確かに、いろいろと限界がありますからね……それでは、次回予告をお願いします」

作者「彼女たちが負った新たな役目とは一体？ 次回『使い回し』ご期待ください」

第四話 使い回し

一番艦「佐州」による初の艦載された四六センチ砲による砲撃から約二年後の一九四〇年三月一日、四番艦の「隠州」が就役。これにより「佐州」、「淡州」、「吉州」及び「隠州」の四隻が揃い、未だに浸水さえしていなかった「秋津洲」に先んじて四六センチ砲搭載艦による戦隊（第五一戦隊）が組まれた。

とはいえこの時までには四六センチ砲を初めとする新型火器の試験は終了しており、機銃や両用砲については戦艦や空母を初めとする艦艇への本格的な搭載が始まっていた。そこで四隻に課された新たな任務が、「秋津洲」を初めとした新型火器を搭載する艦艇の乗員を育成するための練習艦となることであった。

折しもワシントン及びロンドン海軍軍縮条約の失効によって、それまで練習艦となっていた「三笠」を含めた日露戦争世代の戦艦及び装甲巡洋艦はそれぞれ工作艦や標的艦に改装されつつあり、海軍は新たな練習艦を欲していた。そこに最新鋭の火器と電探を搭載した艦が四隻も現れたことはまさに渡りに船であり、四隻には大勢の将兵が配属されることとなる。

一九四〇年四月、東京湾の砲艦「佐州」艦上。

「ふむ、今までの乗員よりは練度が高いな」

司令塔の上から甲板上を走り回る将兵の様子を見下ろす佐州は、彼らの動きに満足げであった。近々進水予定の戦艦「秋津洲」及びその同型艦である「瑞穂」の乗員となることが予定されている彼らは、多くが第一艦隊や第二艦隊の各戦艦から選抜された精鋭であり、

その練度も極めて高い者ばかりだったのである。

「連合艦隊全体から掻き集めた精鋭なのですから、当たり前です」
「淡州……人が喜んでいるのをぶち壊しにするのは止してくれ」

突然やってきた妹の辛辣な言葉に、佐州は機嫌を損ねる。髪を首の辺りまでしか伸ばしていない彼女は佐州型砲艦二番艦「淡州」の艦魂であり、背が小さいことも手伝って見た目は佐州以上に幼く見えたが、その言動は良く言えば落ち着き払った、悪く言えば薄情なものであった。

「一度現状に満足すれば、それ以上の改善を阻害することになりかねません」

「そ、それはそうだが……うっ」

淡州の指摘に、佐州は狼狽えてしまう。だが根が実直な彼女は、このままでは妹に示しがつかないとばかりに、苦し紛れの言い逃れを図った。

「わ、私は満足したとは言っていない。飽くまで、今までの乗員と比べての感想を言ったまでだ」

「先程の表情は、どう考えても今の状況に満足なさっているものではないが？」

「うっ……なら、そういう淡州はどう思う？」

返答に窮した佐州は、慌てて妹に意見を問う。あわよくばその時の返事に何らかの反論をすることで話の主導権、ひいては姉としての威厳も保とうとしていたが、淡州の返事はやはり素っ気ないものとなった。

「まだ、改善の余地があります……それ以前に、そもそも私たちを練習艦として使うということ自体に限界があると言わざるを得ません」

「何故だ？ 搭載している兵装は最新鋭のものだし、機関の種類や区画配置だって他の軍艦と基本は変わらないぞ？」

「ですが、それだけです。この艦では実戦のような四六センチ砲の弾着観測や斉射の訓練はできませんし、艦の大きさや内部構造が違えば損傷時の応急処置もやり方が変わってきます」

淡州の意見は事実ではあったものの、それを述べている間の彼女の表情はどこか浮かないものであった。その原因を素早く察知した佐州は、我が意を得たりとばかりにほくそ笑む。

「しかし、この問題を解消するとなるとそれこそ第一線の戦艦や駆逐艦をそのまま練習艦に転用しなければならない。そのような余裕は我が国には到底無いと分かっているからと、渋々現状を受け容れているせいでそのような顔をしている……といったところか？」

「ええ……御明察のとおりです」

姉に自分の考えを完全に読まれてしまったことと、日本の国力の限界を恨むかのように、淡州は大きく息を吐く。姉の満足を見抜いた時の自信ありげな表情はどこへやら、今の彼女は完全に士気を喪失していた。

「そう落ち込むな。そもそも、その国力の限界が私たちを生み出したのだからな」

「それは、そうですが……はあ」

対地砲撃用のモニター、試験艦、そして練習艦。国力が限られているせいでこれらの役目を種類の艦艇に負わせなければならない

という現状に、淡州はまたもため息をつく。例えその状況故に自分たちが生み出され、また必要とされていようと、彼女にとっては耐え難い危機感であったのだ。

第四話 使い回し（後書き）

作者「特に将来『秋津洲』型戦艦の乗員となる面々が優先的に配属されるでしょうから、ひよっとしたら輝久も乗っているかもしれないね」

大隅「ですが彼は艦魂の存在に気付かなかった、と」

作者「そうしないと、本編と矛盾するからね。飽くまで、彼が艦魂の存在を知ったのは予備会議室での一件においてということだ」

朝日「ただこのまま後付けの設定を増やしていくと、どこかで破綻しそうですがな」

三笠「それでは、次回予告をお願いします」

作者「対米開戦に当たって、彼女たちは一時的に練習艦としての任務を解かれます。次回『選べぬ晴れ舞台』ご期待ください」

第五話 選べぬ晴れ舞台

練習艦としての任務が暫くの間続いた後、戦艦「秋津洲」が就役した一九四一年の半ばには、アメリカ及びイタリアと六カ国協約締結国の関係が著しく悪化。戦艦「メイン」の爆沈を契機としてこの亀裂は修復し難いものとなり、日本国内においても度重なる挑発行為を行うアメリカを敵視して対米開戦止むなしとの声が上がりがつた。

そしてアメリカが一九四一年十二月八日付での戦争開始を通告したことにより、日本はついに開戦後の計画立案とその準備を余儀なくされる。その第一段階としての攻略対象のひとつに挙げられたのが、当時アメリカの勢力下に置かれていたフィリピンであった。

フィリピン攻略には当初第二艦隊を主力とする部隊が当たることとされたが、特にコレヒドール島を初めとするフィリピン各地の砲台は、六隻の超弩級戦艦を擁する第二艦隊を以てしても容易には近づき難い威力を有していた。ましてや軽巡洋艦や駆逐艦に陸上砲台の砲弾が直撃すれば、轟沈させられる恐れも小さくない。

そこで第二艦隊の空母や台湾の航空部隊といった航空機による砲台の無力化が計画されたものの、第二艦隊の空母は直掩や対潜警戒で手一杯になるであろう「瑞龍」一隻のみ。台湾の航空部隊も攻撃機では航続距離が不十分であり、爆装した戦闘機では爆弾搭載量が不足、双発爆撃機では爆撃の精度に難があるといったように、決定的な攻め手を欠いている状態であった。

このような事情から、第二艦隊は「佐州」型砲艦による支援砲撃を要請。不発弾が鹵獲されることによる主砲口径の漏洩という危険

はあったものの、上陸船団や虎の子の「上総」型戦艦を危険に晒すよりはましであると判断され、四隻の第二艦隊への随伴が決定した。

十二月一日、第二艦隊に続いて横須賀港を出港間近の「佐州」予備士官室。

「せっかくの晴れ舞台ではあるが、相手が陸上砲台ではなあ……我儘だと頭ではわかっていても、やはり敵艦との砲撃戦を繰り広げてみたいものだ」

「私たちは軍艦の艦魂です。ならそんな感情を捨てて、与えられた任務に全力を注ぐべきです！」

「正論だが、相変わらず可愛げの無い妹だ」

自分たちへと下ったおおむね予想どおりの命令へと口を尖らせている姉に、淡州は叱咤するような声で持論をぶつける。妹の冷静とはいえ薄情な態度に対し、佐州は顔を背けながら余計に機嫌を損ねていた。

「イギリスで建造されて私たちとほぼ同等の一八インチ砲を搭載したモニター『ジェネラル・ウルフ』と『ロード・クライブ』は、欧州大戦でベルギー沿岸への艦砲射撃に用いられました。お気持ちは分からないでもないですが、開戦となれば私たちも似たような任務に回されることは予想がついたはずですよ」

「だが、同じ欧州大戦で『マーシャル・ソルト』や『エレバス』、それに『テラー』はオステンドやゼーブルツへのドイツ海軍艦艇を砲撃したではないか。おまけに、巡洋戦艦を相手に砲撃戦をした艦もいると聞いたぞ」

実戦の例を持ち出してきた妹に対し、佐州も負けじと実例を示して対抗する。しかしそれを聞いた淡州は、佐州の予想に反して驚く

どころか呆れたような表情になった。

「な、何がおかしい！」

「最初の例は兎も角、二番目の例は『M28』と『ラグラン』がダ―タネスル海峡沖のインブロス島泊地で巡洋戦艦『ゲーベン』と軽巡洋艦『ブレスラウ』に襲われたのであって、戦おうとして戦ったわけではありません。おまけに、モニターの側は二隻とも撃沈されているではないですか」

「私たちには世界最大の艦砲とそれなりの装甲がある。戦艦を相手取るには不足でも、魚雷を持たないアメリカの一等巡洋艦風情には負けん！」

飽くまでモニターが対艦戦闘を行うのは無謀であると説く淡州と、自らの火力と装甲を恃みにして相手を選べば勝算があるとする佐州。二人はここまで一步も譲ろうとしなかったが、良きにつけ悪きにつけ物事に執着しない淡州のほうが、先に妥協案を示しにかかった。

「因みに、フィリピンにいるアジア艦隊には戦艦は配備されておらず、『ペンサコラ』級一等巡洋艦二隻が最大の艦であるようです。ですからこの程度の相手なら、もしかしたら我々に撃滅の命が下るかもしれませんね」

「望むところだ！ 上総閣下のお手を煩わせるまでもない、私たちが奴らの船体をへし折ってくれる！」

この時佐州が冷静さを保っていれば、持ち前の洞察力によって、妹の言葉が言い争いを長引かせないための出任せであると見抜くこともできたであろう。しかし敵艦を自らの主砲で撃沈したいという衝動に駆られていた彼女は落ち着きを欠いており、まんまと妹の策にかかったのである。

日米開戦後、第一日目にしてこの希望は潰えたかに思われた。ところが思わぬ形によって、彼女たちは対艦砲撃の機会に恵まれることとなる。

第五話 選べぬ晴れ舞台（後書き）

富士「おい待て、最後の一文はどういう意味だ？」

作者「文字どおりです。この後、彼女たちは対艦砲撃を行うことになります」

敷島「とはいえ、目標になりそうな艦艇と言えば相当か限られてくるけど……あれじゃあ、据え物切りにしかならないよ？」

作者「彼女たちに対艦砲撃の好機を与えてやるとなると、それぐらいしか方法が思いつかないのですよ」

三笠「ただ。その前には厄介なものが鎮座していたような……次回予告をお願いします」

作者「失意から自棄酒を呷る佐州の元に飛び込んだ命令とは？ 次回『心中の汚名』ご期待ください」

第六話 心中の汚名

十二月八日午後五時、砲艦「佐州」予備士官室。

「姉さん、そんなに落ち込まないでください」

「これが落ち込まずにいられるか。一等巡洋艦は両方とも沈没し、残ったのは死にかけの二等巡洋艦一隻と駆逐艦だけ。最早、私たちによる対艦砲撃の機会は永遠に失われたのだ」

淡州は自分に愛想が無いことを重々承知の上で、姉を励まそうとする。だが当の佐州は士気を著しく低下させており、一人自棄酒を呷るといふ有様であった。淡州はそんな姉に釘を刺そうか悩んだものの、酩酊している佐州には糠に釘となることが明らかだったのでぐっと堪えた。

この日の午後には繰り広げられた海戦により、アメリカ海軍アジア艦隊は重巡洋艦二隻と軽巡洋艦一隻、及び駆逐艦三隻を喪失。残った主要な艦艇は何れも損傷した軽巡洋艦「ヘレナ」と駆逐艦十一隻、及び同じく大半が高雄航空隊の攻撃によって撃沈破された潜水艦だけとなった。

「ですが、手負いの二等巡洋艦や駆逐艦とて、丸腰同然の上陸船団にとつては脅威です。必ずや、何らかの方法で彼女たちを仕留めなければならぬでしょう」

「むう……据え物切りなど、面白くなあ」

妹が匂わせた対艦砲撃の可能性にも、佐州の返事はつれないものである。既に一升瓶を殆ど飲み干してしまった彼女の顔は酷く紅潮しており、机に突っ伏したまま呂律が回らない状態で文句を垂れて

いた。

「今回遁走した艦艇は、何れも未だに航行能力を有しているのです。据え物切りではありません」

「はあ……仕方ない。他に仕留める相手もないのだろうし、そいつらを屠る命令が出るのを待つとする……か」

そう言うと、佐州は酒の飲み過ぎと落胆から気を失ってしまふ。そのため淡州は止む無く、姉の部屋を後にした。

翌朝、同じく砲艦「佐州」予備士官室。

「姉さん、まだ寝ているんですか」

前日と全く変わらない状況で眠りこけている姉に、淡州は驚きを隠せない。「姉さん、姉さん」と呼びかけながら体を揺り動かしてはみたものの、佐州は到底起きそうになかった。

「姉さん、砲撃命令が下りましたよ」

「なっ、どいつに……ぐうっ！」

耳元で告げられた「砲撃命令」の言葉に、佐州は思わず飛び起きる。だが前夜の飲酒と急に意識が覚醒したことが相まって、彼女は強烈な頭痛に襲われた。

「あいたたた……迂闊だった。で、目標は？」

「マニラ周辺に停泊する敵艦船だそうです」

「そう、か……予想どおりの小物相手だが、警沢も言えんか」

昨夜とは打って変わって、佐州は寂しそうではあるものの事態を

受け容れた様子である。その変貌ぶりに驚いた淡州は、「姉さん、昨夜とは態度が全然違いますか……何かあったのですか？」と問いかけた。

「実は、あの後暫くして一度目が覚めてな……よく考えてみれば、私も相当冷静さを欠いていたと反省した次第だ。済まなかった」
「なるほど。で、そのような状態で船体の方は大丈夫ですか？」
「命令が下ったのだろうか？　なら、どんな状態であろうと全力で事に当たるだけだ」

佐州は朦朧とした意識に耐えながらも、極力淡州へとそれを悟られないようにすくと立ち上がる。とはいえ妹である淡州に不調を隠し切れるわけもなく、彼女は容易に姉の瘦せ我慢を見破ったが、ただでさえ万全ではない彼女の状態をこれ以上悪化させては任務に差し障ると考えて明言を避けた。

（淡州のことだ、この強がりも十中八九、いや九分九厘お見通しだろうが……何も言わないのは、私の士気を殺ぐまいとしてくれるのだろうか。恩に着るぞ）

（姉さんは、私が自分の演技を見抜いていると分かっているはず。なら、余計な口出しはしない）

お互いに相手の意思をほぼ完全に把握していながら、二人は暫く沈黙を続ける。そして淡州は「砲撃は、敵潜水艦による待ち伏せを避けるために夜間となるそうです」とだけ告げた後、飽くまで落ち着いた素振りのまま予備士官室を後にした。

「はあ……しかし、私としたことが手柄を焦って何たる様だ。こうなったらせめて湾内の敵艦を一隻残らず屠り、そいつらの船体から流れ出た重油と血で私の汚名を雪いでくれる！」

今回の一件を知っているのが佐州自身と淡州だけであり、淡州が佐州へと罵詈雑言を浴びせているわけでもない以上、「汚名を雪ぐ」という言い回しは不自然とも考えられる。しかし他ならぬ佐州の心中にこそ、軍艦の艦魂としてあるまじき行動をとったという事実が、極めて大きな不名誉として残っていたのである。

第六話 心中の汚名（後書き）

敷島「（いつ敵が来るかもしれないのに酒を飲むなんて）だらしねえな？」

作者「（確かに問題ですけど、気持ちとしては）仕方ないね」

富士「なあ……そのネタ、前にも使わなかったか？」

作者「ネット上ではしばしば使われますから、『大丈夫だ、問題ない』と申し上げてみる次第」

朝日「余り後書きでネタを乱発していると、『少し、頭冷やそうか』と言われるぞ」

三笠「これ以上続けると收拾がつかなくなりそうなので、次回予告をお願いします」

作者「ようやく訪れた対艦砲撃の機会。しかし佐州は……次回『殺すのは自分から』ご期待ください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0578ba/>

艦魂たちともうひとつの日本海軍史外伝 砲艦「佐州」型

2012年1月11日05時50分発行